様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６１６０２０

研究課題名（和文）メディア表現によるワークショップ型ケアの理論と実践

研究課題名（英文）The Theory and Application of Care in Accordance with the Workshop Method of Media Expression.

研究代表者
小川　明子（Akiko, OGAWA）

名古屋大学・国際言語文化研究科・准教授

研究者番号：００３５１１５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，日本においてこれまでほとんど研究されてこなかったデジタル・ストーリーテリングをめぐって、その作品とワークショップ・プロセスが、いかに障がいを抱えた人びとなどの自己表現や社会的理解において機能するか，実践を行いながら検証するとともに、その成果を学会や英語論文、ウェブサイトなどで海外等も含め広く公開した。これまで欧米で展開されてきた個人をベースにしたメソッドから、対話的・協働的なプロセスへと変容させることによって、個人的なネットワークを通じても共感と理解が広がるプロセスを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Through conducting several workshops among marginalized groups, we explored how Digital Storytelling and its workshop process contribute to the self-expression and the recognition of the marginalized people in society. In this research, we proposed the dialogic and collaborative Digital Storytelling model which encouraged empathy and mutual understanding toward storytellers. We also provided presentations in the international conferences and published articles and webpages in English.

研究分野：メディア論　社会情報学

キーワード：ケア　デジタル・ストーリーテリング　ワークショップ　メディア　メディア表現　コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

研究開始当初に行っていた大学生との「デジタル・ストーリーテリング」実践が，周縁的立場に置かれた人びとが苦痛や想いを誰かにものがたり，そしてその物語がメディアを通じて社会に理解されるケアの側面を持っているのではないかという点から研究が始められた。

２．研究の目的

本研究では，社会の周縁に置かれた人びとが，ワークショップで他者との対話を通じて，自らの状況を理解，改善し、メディアで物語や作品として表現することで社会に参画してゆくプロセスを「ケア」と捉え，その理論と実践を，医療福祉を初め，さまざまなケアの現場で活かしていく可能性をさぐることを目的とした。さらに本研究では，デジタル・ストーリーテリングの実践を手がかりにしながら，他者との対話とメディア表現を重視した，マス・メディアでもソーシャル・メディアでもない，新たな形のケア的メディア・コミュニケーションの枠組を示しだすことを目的としている。

３．研究の方法

本研究以前の成果と方法論，具体的には，実践的メディア論を展開してきた水越伸の「批判的メディア実践」の方法論を活かしつつ，３つの方法論を併用して研究を行った。

まずは文献研究である。ナラティヴ論，とりわけ，ナラティヴ・メディスンやナラティヴ・アプローチや，ワークショップ研究，福祉とコミュニティ・アートをめぐる研究成果を中心とした知見の整理である。

続いて，インタビュー調査（半構造化／アクティブ・インタビュー）である。ひとつには，英国で特にケアを中心とした実践を展開している「Patient Voices」やホスピタル・ラジオ，さらに日本で患者たちの声を集めたウェブサイトを構築しているディペックス・ジャパンなど先行事例のヒアリング調査である。さらに，私たち自身，あるいは私たちが提起したワークショップから展開していったワークショップの参加者に対しての聞き取り調査である。

そして最後に，ワークショップに参加した研究者自身が関与しつつそこから知見を見出だす「関与観察」と「エピソード記憶」を用いてワークショップの中から研究者自身が知見を見出だしていく方法を併用した。

４．研究成果

本研究の成果は３点ある。

(1)英国を初めとする医療領域でのワークショップやメディア表現をめぐる先行事例がまとめられたことである。とりわけ，英国ホスピタルラジオやデジタル・ストーリーテリングの「患者の声」，サウス・ウェールズ大学の「ストーリーワークス」，日本で患者の声を集めた「ディペックス・ジャパン」などについての先行事例についてまとめ，その可能性と課題について整理をした（小川，2013，土屋，2013，2015）。

（２）4 回にわたるワークショップ実践（と１回のワークショップ観察）を行い，そこからワークショップやメディア表現，とりわけ協働的な物語化のプロセスが，個人の自己表現や自己物語の生成，他者との相互理解においてきわめて有用な意味を持つという点についての具体的な知見が得られた。とりわけ身体障がいのある方や一般の人を巻き込んだワークショップ，そして知的障がいを持つ人びととのワークショップでは，遊び的な要素がいかに人びとの間に存在する障壁を溶解させ，表現へと導くのかが実証された。これまでのワークショップでは，「遊び」はアイスブレイクの要素として用いられることが多かったように思われるが，遊びはそれに留まらず，人の背景や社会的立場を一時的に無化し，参加者を平等にする力を持つ。とりわけケアを必要とする人びとと一般の人びととが一緒にワークショップに参加する際に，何らかの学習やエンパワメントといった側面が強調されすぎてしまうと，逆に彼らの自律性を損なってしまう可能性がある。遊びは，活動に正解がないこと，また誰もが運も含め，平等に関わることができる活動であることを意識する上で重要な要素であることが明らかになった。また被災地でのワークショップでは，失敗例も含め，ワークショップという現実空間での他者との出会いやたわいないおしゃべり，他者の話を偶然聴くことなどが，想いの創出を促す意味で，結果的に物語制作において重要であることが明らかになった。

ワークショップ実践からは，最も重要なこととして，物語制作（因果）のプロセスが，他者を物語的に理解することでもあるために，相互理解において重要な要素を含んでいることが明らかになった。この点において，デジタル・ストーリーテリングが物語を制作する活動である点において，他のメディア表現ワークショップとは異なる点であり，ゆえに，関わったもの同志がその背景や想いを共有しやすいという利点があることが明らかになった(Tsuchiya&Ogawa, 2015,小川 2015b)。

そのほかに，私たち研究者が行うワークショップではなく，学生主体，地元ファシリテーター主催のワークショップからは，研究者以外がワークショップを行う際の課題を抽出した。

（３）３点目に，研究結果の公開と伝達である。わたしたちは論文やウェブサイト，国際学会での発表，国際シンポジウムを積極的に行うことによって，ケア的メディアワークショップの活動を，一般の人びとに広めていくことに尽力した。ウェブサイトについては，作品のほか，プログラムや実施報告，リンクなど関連情報を掲載している。実際そこから，

福井県立大学の舟木准教授らによるソーシャルワークへの実践に用いられたり，中津川での知的障がいを持つ人びとの実践に取り入れられるなど具体的な動きが見られた。

さらに，国際シンポジウムでは，英国でケア関連のワークショップに携わるサウス・ウェールズ大学のカレン・ルイス氏を迎え，デジタル・ストーリーテリングの来し方行く末について講演とワークショップを行い，70 名を超える参加者と討論することを試みた。またこののち，ソーシャルワークとデジタル・ストーリーテリングに携わる人たち向けのサイト「デジタル・ストーリーテラーズ」という交流サイトを立ち上げた。

また海外での発表を積極的に行うなかから，とりわけ私たちのアプローチである「ストーリー・ウィービング・モデル」が注目を浴び，海外（英国／ノルウェーを中心とするデジタル・ストーリーテリング関連書籍）文献への寄稿が求められている。

またこれらの成果は，研究代表者の博士学位論文「声なき想いに物語を−対話的・協働的デジタル・ストーリーテリングの理論と実践」にまとめられており，現在，出版に向けて改稿中である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）

(1)小川 明子 「医療と患者をつなぎなおすデジタル・ストーリーテリング　英国『Patient Voices』プロジェクトの試み」愛知淑徳大学論集メディアプロデュース学部篇 3 号，2013.p.33-47.

(2)土屋 祐子「デジタルストーリーテリングのグローカル展開　−転換的・共創的に広がる市民メディア実践」広島経済大学研究論集 Vol.35-4，2013，p.191-199.

(3)Akiko OGAWA and Yuko TSUCHIYA “Designing Digital Storytelling Workshops for Vulnerable People: A Collaborative Story-Weaving Model from the “Pre-Story Space”” Journal of Socio Informatics Vol.17.No,1，2014，24-36.(査読有)

(4)TSUCHIYA,Y. and OGAWA,A. “Digital Storytelling with Different People: A Collaborative Method beyond The Digital Divide” 広島経済大学研究論集 37 巻第 4 号，p.1-11. 2015.

(5)小川 明子「地域メディアとストーリーテリング -地域メディア研究のあらたな展開に向けて」メディアと社会，名古屋大学大学院国際言語文化研究科，Vol.7. 43-60. 2015a(査読有).

(6)小川 明子「対話的・協働的デジタル・ストーリーテリングの提案」国際シンポジウム「デジタル・ストーリーテリングの可能性」開催報告，メディアと社会（名古屋大学大学院国際言語文化研究科），Vol.7. 95-102. 2015b.

(7)土屋 祐子「世界で広がるデジタル・ストーリーテリング−越境し，変容するメディア実践」国際シンポジウム「デジタル・ストーリーテリングの可能性」開催報告，メディアと社会(名古屋大学大学院国際言語文化研究科），Vol.7.2015.

〔学会発表〕（計 6 件）

(1)溝尻 真也「アキバの記憶をめぐる物語とその生成過程−対話型映像制作実践『メディアコンテ秋葉原』の事例を通して」第 61 回巻頭社会学会大海 2013.6.16.

(2)土屋　祐子「ラジオ生態系の遷移 Transition of Radio Ecosystem(ホスピタルラジオ実践について)」シンポジウム「ラジオのメディア・エコロジー」 山口芸術情報センター　2013.11.16.

(3)Y.Tsuchiya and A. OGAWA ”Creating Digital Stories with Different people :An Collaborative Attempt beyond "Dis-communication" and Digital Divide” International Association for Media and Communication Research, Hyderabad，India，2015.7.17.

(4)A.Ogawa and Y.Tsuchiya “Does a vulnerable person really have a story to tell? A proposal of a dialogic story-weaving model from the “pre-story space”” 5th International Digital Storytelling Conference, Ankara，Turkey，2013.5.9.

(5)小川 明子　「対話的・協働的デジタル・ストーリーテリングの提案」国際シンポジウム「デジタル・ストーリーテリングの可能性」名古屋大学，2014.11.30

(6)土屋 祐子　「世界で広がるデジタル・ストーリーテリング」国際シンポジウム「デジタル・ストーリーテリングの可能性」名古屋大学，2014.11.30

〔図書〕（計　　0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　２件
(1)メディア・コンテ（作品，概要，ツール，研究・実践へのリンク集）
http://mediaconte.net/
（３）デジタル・ストーリーテラーズ
http://ds.mediaconte.net

６．研究組織
(1)研究代表者
小川　明子　(OGAWA,Akiko)
名古屋大学大学院国際言語文化研究科（准教授）
研究者番号：00351156
(2)研究分担者
伊藤　昌亮（ITO，Masaaki）
愛知淑徳大学メディアプロデュース学部（准教授）
研究者番号:80548769
(3)研究分担者
土屋　祐子(TSUCHIYA，Yuko)
広島経済大学経済学部（准教授）
研究者番号:80458942
(4)研究分担者
溝尻　真也(MIZOJIRI，Shinya)
目白大学社会学部（講師）
研究者番号:50594008